シカゴ社会学の社会調査の系譜（一）

Emory Bogardus の調査法[1)]

吉　村　治　正*

Research Methodology of Emory Bogardus: A Historical Case Study of the Chicago School of Sociology

Harumasa YOSHIMURA

要　旨

本稿では、シカゴ社会学の学説史研究の一事例としてエモリー・ボガーダス（Emory Bogardus）をとりあげ、彼の展開した社会調査方法論を検討した。シカゴ社会学というとエスノグラフィーに衆目が集まる。そのため、社会的距離尺度を提唱し戦後の計量的社会分析の確立に大きく貢献したボガーダスは、シカゴ学派の中ではマージナルな存在とみなされている。だが、彼の 1920 年代から 30 年代の研究記録を検討することで、この態度測定法は、ライフヒストリー法による社会調査の困難さの克服を求めた試行錯誤の産物であったことが明らかになった。

キーワード：シカゴ社会学、ライフヒストリー、社会的距離尺度

本稿では、シカゴ社会学に関する学説史研究の一事例としてエモリー・ボガーダス（Emory Bogardus）をとりあげ、彼の展開した社会調査方法論（research methodology）を検討することで、シカゴ社会学の展開およびシカゴ大学外部への影響の普及を論じていく。シカゴ学派の社会学に関する研究は多い。そして、これらの先行研究の中でエモリー・ボガーダスという研究者はきわめてマージナルな位置づけにある。ボガーダスはシカゴ大学で 2 年しか学ばず、同大学で教壇に立ったこともない。シカゴ学派のお家芸とされるエスノグラフィーも著しておらず、パーク（Robert Park）の教え子でもない。にもかかわらず、彼はシカゴ学派の一員とみなされ、先行研究の中で頻繁に言及される。だが、このボガーダスに着目することで、シカゴ学派を含めた当時のアメリカ社会学の動向の一端が明らかになる。

2018 年 9 月 12 日受理　*社会学部総合社会学科教授

Ⅰ 問題の所在

学問の歴史すなわち学説史を論じるときは、それを論じる研究者の学問的アイデンティティが問われることになる。それは、現在におけるその学問の基本的特性が明瞭に定義されなければ、こうした特性が歴史的にどのように形成されてきたかを論じることはできないからである（河村 1973）。複数の社会学者がいて、その各々が社会学という学問の根幹部分について異なった理解をしているのであれば、当然ながらそれぞれ異なった学説史が描かれる。こうした点からいえば、社会学史を論じるという作業は、単に過去を振り返るというだけでなく、これを論じる本人が社会学のあるべき姿をどのように理解しているかを明らかにしていくという作業でもある。

この点について、プラット（Platt 1996）の指摘はきわめて重要である。プラットは、一般的には学説史は理論の歴史として描かれるが、今日の状況を考えると必要とされるのは、むしろ方法論（research methodology）の歴史であるという。ウェーバーやデュルケムといった社会学の偉人たちがどのような理論を展開してきたかを振り返るのは、たしかに楽しい。だが、彼らの時代には慈善事業家やジャーナリストが扱っていた社会問題・社会政策といった問題がその後の社会学の発展の中にとりこまれていったことで、今日の社会学者は学者（academician）というだけでなくリサーチャー（researcher）としての役割を不可避に担うようになった。今日の社会学者のうち、純粋な学術的関心だけで研究活動を進めている者は一体どれくらいいるのだろうか。多くは社会政策や社会運動との関わり合いの中で研究対象と関わっているのではないか。こうした状況で学説史に必要とされるのは、何を論じてきたかという結論だけでなく、どのような社会現象に対しどのような情報を集めそれをどのように分析してきたのかという、いわば方法論の歴史である。ところが、こうした方法論の歴史はほとんど論じられることがない。それは、現代の状況で社会学に携わる者にとって深刻な問題といえる。

方法論への着目の不足は、シカゴ学派の社会学についても指摘される。シカゴ学派の社会学については、米国内のみならず日本でも多数の学説史研究が著わされている（Abbott 1999; Bulmer 1984; Faris 1967; Fine 1995; Kurtz 1984; Smith 1988; 秋元 1989; 宝月・中野 1997; 宝月・吉原 2004; 中野・宝月 2003）。これらのほとんどはシカゴ大学関係者の刊行したエスノグラフィーを紹介したものである。だが、執筆当時は大学院生だった各著者がどのように自己の調査フィールドに接し、どのようにデータを集め、それを整理分析していったかを論じた研究はほとんどない。これは宝月（中野・宝月 2003）も認める点である。しかしながら、シカゴ学派と限定した場合、こうした理解は大きな問題となる。つまり、方法論への着目が不十分であることで、第二次大戦後の計量的社会分析（quantitative analysis）の発達が説明できないのである。

シカゴ社会学というと、エスノグラフィーすなわち質的研究をイメージする。実際、前掲の研究書のほとんどすべてが「黄金期」と呼ばれる 1920 年代から 30 年代にかけて、主にロバート・パークの指導の下に刊行されたエスノグラフィーをとりあげている。黄金期以外の時期をとりあげたものとしては、唯一ファイン（Fine 1995）による第二次大戦後から 60 年代初頭に焦点をあてた研究があるが、このファインもシカゴ学派を質的研究グループとしてとらえている。だが、

こうした先行研究はきわめて大きな点を見逃している。それは、シカゴ学派こそが第二次大戦後のアメリカ社会学の計量的社会分析を牽引してきたという事実である。戦後アメリカにおける計量的社会分析の興隆を導いたとされる"The American Soldier"を著したストウファー（Samuel A. Stouffer）はシカゴ大学で学位を取得し教壇に立っていた。人口学の泰斗であり米国勢調査局を率いたハウザー（Philip Hauser）も、日本の階層研究のバイブルともいえる"The American Occupational Structure"を著したブラウ（Peter Blau）とダンカン（Otis Duncan）も、いずれもシカゴ大学社会学部で学び教えていた。この巨大な系譜を見失うことは、学説史を論じるうえできわめて重要な損失となる。

シカゴ社会学の学説研究で計量的社会分析について触れているのは、筆者の把握している限り、バルマー（Bulmer 1984）だけである。バルマーは黄金期シカゴ社会学の興隆をスモール（Albion Small）、トーマス（William I. Thomas）、パークという三名の教員を中心とした師弟関係のネットワークとしてとらえ、個々のエスノグラフィーをこれらネットワークから生じたアウトプットと位置づけた。そして、この発想を延長することで、1930年代からはじまる計量的社会分析の興隆を論じた。つまり、バルマーは、シカゴ学派の計量的社会分析の興隆を1927年に着任したオグバーン（William Ogburn）とその教え子たちとの関係に求めた。この指摘はきわめて的確で、オグバーンが統計学の授業を開講した1920年代以降、シカゴ学派での統計学的な社会分析が急速に発達している。たとえば非行少年のライフヒストリー研究で知られるクリフォード・ショウ（Clifford Shaw）も1929年に回帰分析を用いた事例を報告している（Shaw 1929）。

他方で、バルマーが軽視したのは、計量的社会分析の前提となるデータ収集の技術といえる。計量的社会分析には統計学の知識が必要とされるが、統計学ができれば計量的分析ができるというものではない。統計学を用いてデータ分析を行うには、統計分析に適合するような形で情報が集積されていなければならない。実は、これは計量的社会分析に携わる者にとってはきわめて大きな制約となる。統計学的分析を適応できるような、できる限り偏りがなく可能な限り正確な情報をどうやって収集するか。つまり計量的社会分析の発達には、統計学だけでなく情報収集の方法、survey methodologyの確立が不可欠となる。こうした点を踏まえるならば、シカゴ大学で急速に計量的社会分析が発達したのには、オグバーンが統計学の授業を開講したというだけでなく、心理学者のサーストン（Louis L. Thurstone）の着任および政治学でのメリアム（Charles E. Merriam）の存在が大きい。こうした論点を踏まえ、以下、ボガーダスという研究者の位置づけを論じていきたい。

Ⅱ ボガーダスとシカゴ学派

ボガーダスの経歴については、オーダムがまとめている（Odum 1951）。ボガーダスは1882年にイリノイ州シカゴの近郊で生まれた。シカゴの北部郊外に位置するノースウェスタン大学で心理学を学び、学士（1908年）および修士（1909年）を取得した[2)]。年齢から単純に計算すれば26歳で学士ということになるが、オーダムによれば、この間にビジネスの世界に関わったり、新聞社などで記事を書いたりといった経験をしていたという。また詳細は明らかではないが大学

セツルメントに関わった経験もあるようで、これが後にシカゴ大学社会学部への進学という選択に影響を及ぼしたのではないかとオーダムは推測している。この後、シカゴ大学社会学部より1911年にPh.D.を取得した。学位論文は"The Relation of Fatigue to Industrial Accidents"という題名で、工場生産場面における労災事故の発生が仕事の単調さや休憩時間の間隔といった要因に大きく左右されることを論じている（Bogardus 1912）。今日でいう産業心理学あるいは産業社会学といった領域に属すると考えてよい。学位取得の直後に南カリフォルニア大学（University of Southern California）へ赴き、1915年の同大学社会学部の創設に携わった。同大学のホームページには今でもボガーダスの紹介ページがあり、また他の資料を見ても、後に彼が他大学に移籍したという記録はみつからない。1931年にはアメリカ社会学会会長に就任している。

ここで注意すべきは、ボガーダスがシカゴ大学を離れたのが1911年、そしてパークがシカゴ大学に着任したのが1914年ということである。つまりボガーダスはパークとは入れ違いになっており、直接的な師弟関係はない。ボガーダスが学んだのは、スモール、ヘンダーソン（Charles R. Henderson）、ビンセント（George E. Vincent）、そしてトーマスである（Odum 1951）[3)]。だが、直接的な関係がないにもかかわらず、ボガーダスはパークとの関係で取り上げられることが多い。バルマーは、後にボガーダスが社会的距離尺度（後述）を提唱したとき、その基本アイデアはパークが提供したとみなしている（Bulmer 1984）。また、ボガーダスの指導下の大学院生であったポーリン・ヤング（Pauline Young）の"The Pilgrims of Russian Town"（1932）は、パークが紹介を執筆してシカゴ大学出版から出版されており、そのためにシカゴ学派のモノグラフとして数えられている（小川 1997）。2年ほどしか籍を置かなかった母校であるシカゴ大学社会学部に、ボガーダスがどれほどの愛着を持っていたかは、わからない。だがパークとボガーダスは調査研究(research)に関しては、きわめて密接な協力関係を結んでいた。それは院生時代の人間関係によるものではなく、Race Relations Survey on the Pacific Coastという調査プロジェクトを契機としていた。

Race Relations Survey on the Pacific Coast（以下、RRS）は1924年にロックフェラー財団の支援を受けて実施された調査プロジェクトである（Lee 2008）。第一次世界大戦後の太平洋沿岸地域においては、アジア系移民、特に日本からの移民労働者に対する差別と排外事件が深刻化しており、これに対する危機意識を感じたYMCAを母体とする慈善団体が人種問題に関する大規模な社会調査を企画し、その実施と統括管理をパークに委託した。アジア系移民について関心を持っていたパークはこれを受託し、太平洋沿岸都市のバンクーバー、シアトル、ポートランド、サンフランシスコ、そしてロサンゼルスを調査拠点として、各都市にある大学に協力を要請した（Park 1926a）。この時にロサンゼルスでの協力機関としての要請を受諾したのが、南カリフォルニア大学とボガーダスだった。パーク自身はこのプロジェクトに非常に入れ込んでおり、関係団体の説得や協力機関との交渉のため、半年以上に渡ってサンフランシスコに逗留したという。だが、パークの思い入れとは裏腹に、RRSは資金不足に悩まされ、関係団体からの協力がなかなか得られないなどの困難にも直面し、バンクーバー、シアトル、ポートランド、サンフランシスコの各都市は一年もしないうちに撤退している（Toy 2006）。その結果、ボガーダスをリーダーとする南カリフォルニア大学のグループは、実質的にRRSの唯一の拠点となった。パークとボガーダス

の接触が増え、またボガーダスに対するパークの評価が高まった（Park 1926b）のは、むしろ当然といえよう。

南カリフォルニア大学とシカゴ大学との関係が緊密だったからRRSの調査拠点を引き受けたのか、それともRRSを受託することで両大学の関係が緊密になったのか、どちらが先行していたのかは、わからない。だがRRSの実施に前後して、両者の間に密接な協力関係が存在していたことは間違いない。たとえば、RRSを受託した際の南カリフォルニア大学側のスタッフに、ボガーダスと並びWilliam Carson Smithという名前があげられている（Toy 2006）が、この研究者については、シカゴ大学側の記録に1920年にPh.D.を取得したとある[4)]。また、RRSが実施される1924年には、同じくシカゴ大学で学位を取得したアール・ヤング（Erle F. Young）が南カリフォルニア大学に採用されている。ヤングはボガーダスと共にRRS（Toy 2006）やロサンゼルス一帯の非行少年調査（Bogardus 1926a）の実施に携わった。ボガーダスはヤングを高く評価しており、"The New Social Research"（Bogardus 1926b）や"Introduction to Social Research"（Bogardus 1936）でも、その業績を何度も引用している。また、このヤングに同伴してシカゴ大学から南カリフォルニア大学に移籍してきたのが、まだ大学院生だったヤングの妻、前述のポーリン・ヤングである。彼女はRRSにも非行少年調査にも調査員として参加しており、後に彼女の著作にパークが寄稿しているのも、ボガーダスとのこうしたつながりが存在していたからと考えてよい。

Ⅲ ライフヒストリー法からの展開

ロサンゼルスの非行少年調査の報告書である"The City Boy and His Problems"（Bogardus 1926a）を見ると、初期のボガーダスの調査法の特徴が明瞭に理解できる。この調査はロサンゼルスの慈善団体の依頼を受けて実施されたもので、頻発する少年非行への社会事業的介入を意図したものであり、したがって福祉関係団体や矯正施設関係者がどのように非行の予防と再発の防止に関わっていけるかという点に中核的関心が置かれている。面白いのは、この調査方法である。ボガーダスは6名の大学院生および12人の有給調査員を動員し、非行少年およびその関係者から非行に至るまでのライフヒストリーを聞き取った。そしてその聞き取りの記録を家庭関係、学校関係、教会関係、余暇、そして不良少年団（gang）との関係に分け、各少年の該当部分を列挙、共通点と特徴を明らかにするという方法をとっている。つまり、この時点でボガーダスはライフヒストリー分析を行っていた。

これは同年の"The New Social Research"（Bogardus 1926b）でより明確に表されている。シカゴ学派で最初に著された方法論のテキストとみなされるパーマー（Vivien M. Palmer）の"Field Studies in Sociology: A Student Manual"の刊行が1928年。したがってこのボガーダスの著作は、同時期のシカゴ学派の研究者がどのような技術と方法でリサーチを行ってきたかを知る貴重な資料として評価される（Lee 2008）。なお、この著作はボガーダスがRRSを実施していた際に、南カリフォルニア大学で、Social Research Clinicという名称で現場に出る調査員を集め事例報告会とインストラクションを行っていた経験をまとめたもので（Park 1926b）、パーマーのような学生向きの教科書というよりは、リサーチャーのための専門書として執筆されている[5)]。

この "The New Social Research" の目次を見ると、ボガーダスがこの時点でライフヒストリー法を社会調査の方法の中核として位置づけていることがわかる。そして社会調査において調査対象者にインタビューして聞き取りをすることがいかに難しいか、という点が強調されている。同書の第5章には The Research Interview というセクションがある。その前の第3章の The Personal Interview で、医師、弁護士、ジャーナリストがどうやってインタビューを行い、どのように情報を収集しているかを論じていることから、この第5章では社会科学という立場から行うインタビューの独自性が論じられると期待される。ところが、ここでボガーダスが取り上げているのが mental release、つまり回答者の心理的警戒をいかに解きほぐすかということなのである。一見すると意外に思えるが、リーはこれが当時のシカゴ学派の方法論の核心に迫るものとみなす（Lee 2008）。

リーによれば、インタビューに回答する人が調査者をごまかし、正確な情報を提供しないという傾向は古くから知られており、したがって特に貧困階層や逸脱者から情報を得る時は、本人よりも近親者や関係者からの方が正確な情報が得られるというのがトーマス以前の常識だったという（Lee 2008）。トーマスもパークも、こうした風潮に対し、本人から直接提供される情報、主観的な情報の重要性を認め、科学的分析の中核にすえた。したがって、いかに回答者の警戒心を解きインタビューに協力させるかというのは、調査の根幹をなす部分であったとみなされなければならない。ところが、あるいはそれ故に、調査員は調査対象者とのコミュニケーションの確立に苦心することになる。調査対象者のうち信頼できるライフヒストリーを提供してくれる人はむしろ少数であるとボガーダスがいうのは、単なる「ぼやき」ではなく、ライフヒストリー法のかかえる方法論上の問題点の指摘なのである。

RRS は関係諸団体からの協力がなかなか得られず、難航していた。これに加えライフヒストリー法の困難さに直面したボガーダスは、別の方向を模索していた様子がうかがえる。パークが寄せた、この "The New Social Research" への序文からは、ボガーダスとパークの間に微妙な認識の違いが存在することが読み取れる。パークはボガーダスのこの著作を高く評価しているが、同時に「本書では research という語は広い意味、つまり実験だけでなく探査（exploration）をも含めた意味で使われている。だが厳密にいえば、survey と research は同義ではない、ということを指摘しておきたい。survey というのは探査（exploration）つまり問題を明らかにすることを目的とするものであり、仮説検証を意図したものではない」（Park 1926b, xiv）と記している。この場合、問題になるのは survey という単語である。survey という単語は、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて社会改良主義運動の一環として行われた貧困調査を指して使われていた（Bulmer et al. 1991）。例えばチャールズ・ブースのロンドン調査やポール・ケロッグのピッツバーグ調査などが、これにあたる。そして、これら survey の政治的色彩の強さや情報収集の恣意性などを批判して、パークらを含めた「科学的」調査（scientific research）が主張されたという経緯がある。だが、このパークの記した序文を読む限り、どうやらパークは「科学的」という言葉で心理学の実験のようなものをイメージしていたようである。ところがボガーダスの場合は、現実の社会問題の複雑さを軽視し対象を極端に単純化したところに旧来の survey の問題点を見出していた。したがってボガーダスが強調したのは、survey そのものの否定ではなく、むしろ survey における対象の客観的かつ正確な把握であり、そこにパークが不満を感じていた様子が前述の序文に読み取れる。

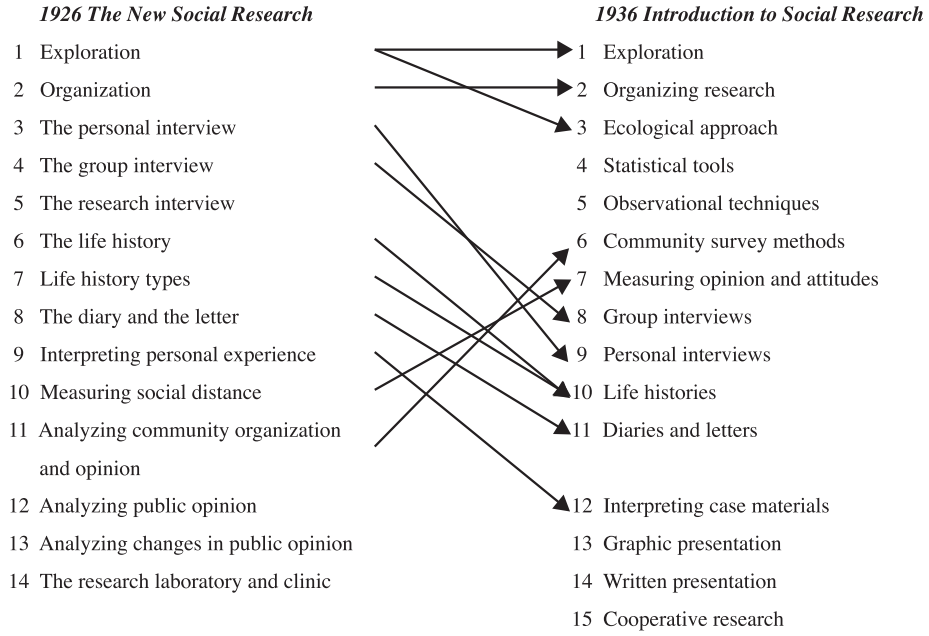

図１：1926 年 The New Social Research と 1936 年 Introduction to Social Research の目次の対応関係

この認識の違いは、”The New Social Research” と 1936 年に刊行された ”Introduction to Social Research” とを比較すると顕著になる。図１に示すように、10 年の間をおいて刊行されたこの２つの著作は、内容からいえば同一の著作とみなせる。内容の対応関係を見ていくと、インタビュー（旧版３・４・５章）やライフヒストリー法（旧版６・７章）に関する記述が大幅に縮小され、特に 26 年の旧版で強調されていた ”The Research Interview”（第５章）という章が削除されている。代わって旧版になかった ”Statistical Tools”（新版第４章）および ”Observational Techniques”（新版第５章）という章が加わっている。旧版の ”Analyzing Public Opinion”（12 章）、”Analyzing Changes in Public Opinion”（13 章）および ”The Research Laboratory and Clinic”（14 章）が 36 年の新版でなくなっているのは、旧版が当時進行中だった RRS を主たる念頭に置いて書かれていたのに対し、新版では他の事例も含めて一般的な方法論の専門書を志向していたために、RRS の内容報告にあたる部分を削り、一般向けに全面的に書き直したからと理解できる。つまり、36 年版はライフヒストリー法の議論を縮小し、代わって統計と行動観察に関する記述を加えたことが大きな変更点といえる。

旧版が執筆された 1920 年代には社会学者が人口統計等を活用し始めていた（Chapin 1920; Giddings 1924; Odum & Jocher 1929）。ただし、この当時は統計とはいっても、平均値や中央値などが中心であった。ところがボガーダスの 36 年の新版には調査票（schedule）の構成や尺度設定（scaling）などへの綿密な言及があり、統計学というよりも、後に survey methodology として発達する領域のひな型となる議論が展開されている。これに対して、行動観察に関する議論は短く、また淡泊である。統計に関する章が 20 ページなのに対し、行動観察を論じた第５章はわずか 10

ページ、しかも大半がドロシー・トーマス（Dorothy Thomas）の実験室での行動観察（Thomas & Andrus 1929）の紹介にあてられている。リンド夫妻（Robert Lynd & Helen M. Lynd）やアンダーソン（Nels Anderson）らの参与観察に触れているのは、1ページに満たない。つまり、この段階で、調査法に関するボガーダスの関心はライフヒストリーを離れ、いわゆるシカゴ・モノグラフとは別の方向に向かっていたといえる。そしてボガーダスの目指した先が、タイトルは似ているが内容が大幅に書き直された新版第7章 ”Measuring Opinion and Attitudes” の記述から明らかになる。

Ⅳ 社会的距離尺度

今日、エモリー・ボガーダスの名前は、社会的距離尺度（social distance scale）の提唱者として知られる。弘文堂の『社会学事典』（見田・栗原・田中 1994）、有斐閣『社会学小辞典』（濱嶋・竹内・石川 1982）、Harper Collins の ”Dictionary of Sociology”（Jary & Jary 1991）などの社会学の辞典の類を見ても、いずれも社会的距離尺度の開発者としてボガーダスの名があり、それ以外の業績については説明がない。

彼の名を有名にした社会的距離尺度が最初に論じられたのは、筆者の調べた限り、1925年の ”Journal of Applied Sociology” の掲載論文（Bogardus 1925b）である。ここでボガーダスは大学生を対象にした実験を行った。まず大学生248人を集め、各人に「アルメニア人」、「ブルガリア人」などの36の人種集団[6]の名前の書いたカードを見せ、それを親しみを感じる、いいとも悪いとも感じない、反感を感じる、の3つのグループに分けるように指示した。そして、その後、それぞれの範疇に振り分けた理由を聞いていった。すると、特定の人種集団に対して反発を感じる理由としては大きく4つ、今までそう言われてきたから（周囲の人がそう言っているから）、幼いころにそれらの人々から怖い（嫌な）思いをしたから、外見などが不快に感じるから、そして大人になってから嫌な経験をしたから、に分けられることを指摘した。

当初の社会的距離の測定法は、このようなシンプルなものであった。だが、ここでボガーダスは2つの重要な点を指摘している。第一は、特定の人種集団に対して反感を持つ4つの理由のうち、もっとも多かったのが、周りがそう言っているからという理由づけであったこと。生活の経験の蓄積から主観的な態度が形成されるというライフヒストリー法の前提からすると、なんとなく、あるいは周りの人がそう言っているからという理由で態度が決まる、しかもそれが一番多いというのは、非常に悩ましい結果である。そして第二の点は、反感を感じるようになった経験を聞き出そうとしても、ほとんどの回答者は過去の経験よりも今の感情をあらわにしたがること。この点は、感情をインタビューすることの難しさを示している。

最初の社会的距離に関する論文の直後、ボガーダスはこれら人種集団への評価を「好き」「好きでも嫌いでもない」「嫌い」という三段階ではなく、7つの質問に対する回答から測定した（Bogardus 1925c）。つまり、「私ならば次にあげるそれぞれの人種集団について以下のように受け入れると思います」という質問を設定し、

（1）結婚して親戚に

(2) 仲のいい友達として自分のクラブに
(3) ご近所として私の住んでいる近隣に
(4) この国で同じ職業で働くことに
(5) この国で市民権を持つ人として
(6) 訪問者としてこの国を訪れる場合に限り
(7) この国から出ていって欲しい

の選択肢から自分の意見に近いものを選ばせた。これが後にボガーダスの社会的距離尺度として広く知られることになるもので、すでに 1926 年（Bogardus 1926a）および 1928 年（Bogardus 1928）には、RRS でこの質問を用いて移民への態度形成を論じている。

ここで問題としたいのは、これがどのように作成されたかという点である。測定尺度を見たときに、それで何が測れるのか、果たしてその測り方は適切なのか、選択肢の間は等距離なのかなど、様々な疑問が提示される。これは当然であり、態度測定の結果が信憑性に足るものであるには、尺度が適切に設定されているという根拠が必要になる。ボガーダスは、そもそもこういう 7 つの文言をどのようにして定めたのか。この具体的な手順が明らかにされたのは 1933 年（Bogardus 1933a）になってからと、かなり時間がたっている。それによると、まずボガーダスは RRS を含めた調査の過程で、回答者が他人に対する好き嫌いを示したと思われる表現をメモしておき、それを 60 個リストアップした。これらには、たとえば「仲のいい友達になれる」、「皆で会食するときにゲストとして招く」、「我が家に招きたくはない」、「この街の市長になってもいい」、など具体的状況が様々に設定されている。そして、これら 60 の文言を一枚一枚のカードにし、100 人の被検者を招いた[7)]。この被検者は、この 60 枚のカードを 7 つの箱、強く肯定的と判断されるものから強く否定的（敵対的）と判断されるものまで、それぞれ肯定の度合いが異なるものを順番に並べた 7 つの箱に分けるように求められた。特定の箱に偏った回答をする被検者（1 つの箱に 15 枚以上のカードを入れてしまうような被験者）は除外し、各カードがどの箱に何枚入っているかを数えていった。次に、一番肯定的な箱に入ると 7 点、一番否定的な箱に入ると 1 点というように、各カードを得点化し、それぞれのカードの平均得点を算出した。そして、平均得点が 7 点、6 点という整数値にもっとも近いカードを特定し、このカードに書かれた文言を選択肢の項目とした。これが上述の 7 つの質問項目である。

つまり、この社会的距離尺度は、各選択肢が恣意的に定められたものではなく、各選択肢の内容が妥当であること、そして各選択肢の間の距離がおおむね等間隔となることを事前の実験で確定させているのである。この手順は心理学で知られるサーストン尺度の設定方法ときわめて近似している（Thurston & Chave 1929）。サーストンの "The Measurement of Attitude" が 1929 年の刊行だから、ボガーダスもサーストンも同じ時期に試行錯誤を繰り返していたことになる。おそらくボガーダスは、パークを介してサーストンの測定尺度の研究を聞き及び、その手順を自分でアレンジし再現したと推測される。そのため、サーストンの尺度構成法とボガーダスの方法では、細部で相違がある（Bogardus 1933a）。第一には、サーストンは各カードの得点を中央値（median）で定義しているのに対し、ボガーダスは平均値（mean）を用いている。第二には、ボガーダスの

尺度は肯定的項目と否定的項目が混ざっており、純然たる意味での累積的尺度（cumulative scale）とはなっていない（Convers 1987）。つまり、たとえば（3）「ご近所として私の住んでいる近隣に」受け入れるという人は、（4）「この国で同じ職業で働くこと」も（5）「この国で市民権を持つ人として」受け入れることにも賛成するだろう。ところが、こうした人は（6）「訪問者としてこの国を訪れる場合に限り」受け入れるという選択肢には同意しない。一時的な訪問でなければ受け入れないというのは否定的感情であり、一時的訪問者としても受け入れるという肯定的感情とは異なる。したがってボガーダスのこの尺度は、（1）から（5）までは累積尺度だが、（6）と（7）は累積尺度になっていない。この尺度で選好を測定しようとすれば、サーストン尺度やガットマン尺度のように、複数の項目に Yes / No で回答を求めるのでなく、複数の名義的選択肢の中から択一で選択させる、一項目からなる尺度とみなされなければならない。にもかかわらず、ボガーダスは累積尺度として回答を求めている（図２）。

	(1) 結婚して親戚に	(2) 仲のいい友達として自分のクラブに	(3) ご近所として私の住んでいる近隣に	(4) この国で同じ職業で働くことに	(5) この国で市民権を持つ人として	(6) 訪問者としてこの国を訪れる場合に限り	(7) この国から出ていって欲しい
アルメニア人						x	
ブルガリア人						x	
カナダ人	x	x	x	x	x		
中国人						x	
⋮							
イタリア人				x	x		
日本人							x
ユダヤ系ドイツ人						x	
ユダヤ系ロシア人						x	
⋮							

図２：ボガーダスの社会的距離尺度の調査票記載例（一部）

出典：Bogardus 1926b, 212-213

要するに、ボガーダスの社会的距離の測定方法、社会的距離尺度は、少なくとも 1936 年の時点で未完成なものであった。それは、ボガーダスが同じ時期に宗教同士の距離（Bogardus 1932）や国家間の距離（Bogardus 1933b）などの測定に試行錯誤を重ねていることからもわかる。そして、この態度を測る尺度の作成というのは、ボガーダスが移民研究の中で自身が抱えていた問題、ライフヒストリー法を用いて人々の態度変容を分析することの困難さに対する解決策の模索の中か

ら生じてきた、方法論上の革新だったのである。

V 結語に変えて

ボガーダスはその後も社会的距離の研究を続け、戦後は世論研究の確立に大きく寄与した。これについては、機会を改めて論じたいと思う。本稿の主眼である、シカゴ学派の黄金期とよばれる 1920 年代から 30 年代にかけてのモノグラフ研究の興隆の背後に第二次大戦後に急速に台頭する計量的社会分析の萌芽がどのように存在していたかという点の検討に立ち戻れば、まず指摘されるのが、第一次大戦と第二次大戦の間の時期にアメリカ社会学に大きな転換、リサーチ（research）への転換が生じていたという点である。1921 年のパークとバージェスによる、いわゆる「グリーンバイブル」は有名だが、同時期に全米のあちこちでリサーチの方法論が論じられている（Chapin 1920; Giddings 1924; Odum & Jocher 1929）。これは、データの収集法と分析法を標準化することで社会学の科学性を確立させようとしたと理解できる。この点は、シカゴ大学という場にとらわれ過ぎると見落としがちになる点である。そして、シカゴ学派の中でマージナルな位置づけを（後年の研究者から）与えられがちなボガーダスも、まさにこの潮流の中にいた。収集の困難なライフヒストリーデータをトーマスらシカゴ学派の研究者が大規模に集めることに成功したのは、シカゴのプロジェクトが行政体との密接な協力関係を維持していたという背景が大きい（Lee 2008）。だが、果たしてシカゴから遠く離れたボガーダスは、同様な支援を得られていたのか。むしろ、こうした困難さに直面したからこそ、新たなデータ収集の方法を求めたと言い得るのではないか。

戦後の計量的社会分析への展開という観点からボガーダスの調査方法論を振り返って気づく第二の点は、当時の主たる問題は統計学的推定の技術ではなく「測定」（measurement）にあったということである。今日、大規模標本に多変量解析を適用することに慣れてしまった我々は、ついつい同じ調査項目をデータ収集の場面で繰り返し使ってしまう。今まで使われてきた調査項目を使えば、その質問で知りたい内容が正確に把握できているのかという問いかけに答える必要がなくなり、その点で安心感を得ることができるからである。だが、最初の研究者、新しい内容のデータを欲する研究者は、そうはいかない。ボガーダスもサーストンも試行錯誤を繰り返した。実験的状況を設定し、ある程度まで正確に測定できているという確証が得られるに至り、初めて実際の研究対象の測定にとりかかった。この試行錯誤の過程、そしてそこで構築された「測定の理論」は、今日の計量的社会分析にとって改めて学ぶべき内容と言えるのではないか。

注

1）本研究は JSPS 科研費 JP16H02050 の助成を受けたものです。

2）たとえばコンバースのように、ボガーダスを社会学者ではなく心理学者とみなす研究者もいる（Converse 1987）。特に第二次大戦後のボガーダスは、人種差別意識や世論の測定など、主に心理学者から注目される業績を多数著わしていることから、こうした理解もできる。だが、コンバースも認めているように、

ボガーダス本人は自らを社会学者であるとみなしていた。

3）学位論文の引用欄を見る限り、おそらく主にヘンダーソンから指導を受けていたと思われる。

4）その他、RRS に携わった南カリフォルニア大学の側の日系人スタッフとして Kenoske Sato という名前がある（Toy 2006）が、筆者が調べたシカゴ大学社会学部の学位取得者リストの中にも同じ名前が存在する（1921 年 M.A. 取得）。なお、シカゴ大学の学位取得者のリストは、近年はインターネット上に掲載されている。

Ph.D. については、https://brocku.ca/MeadProject/Timeline/Doctoral_dissertations_in_sociol.html

M.A. については、https://brocku.ca/MeadProject/Timeline/Masters_Theses_in%20Sociology.html

5）ボガーダスも学生向きのテキストを執筆している。1918 年の "Making Social Science Studies" がそれであり、プラットはこの著作を社会学における方法論の初めての教科書としている（Platt 1996）。ただし、1918 年の初版はプラット自身は現物を確認できておらず、また筆者も確認できなかった。筆者が確認できた第 3 版（Bogardus1925a）から推測すると、こちらは大学生や院生がどうやって論文を作成するかという、今日でいう「卒論の書き方」のような内容だったと思われる。そうなると、これを方法論の教科書とみなしていいかという疑問が生じる。

6）原文において race あるいは racial group。

7）100 人の内訳は大学教員が 66 人、学部生が 34 人となっている。

参考文献

Abbott, Andrew. 1999. *Department & Discipline*. The University of Chicago Press.

Bogardus, Emory S. 1912. *The Relation of Fatigue to Industrial Accidents*. The University of Chicago Press.

---------- 1913. *An Introduction to the Social Sciences*. Ralston Press.

---------- 1917. *Introduction to Sociology*. University of Southern California Press.

---------- 1925a. *Making Social Science Studies, 3rd. revised ed*. Jesse Ray Miller.

---------- 1925b. "Social Distance and Its Origins." *Journal of Applied Sociology*. 9:216-226.

---------- 1925c. "Measuring Social Distances." *Journal of Applied Sociology*. 9:299-308.

---------- 1926a. *The City Boy and His Problems*. House of Ralston Printers.

---------- 1926b. *The New Social Research*. Jesse Ray Miller.

---------- 1928. *Immigration and Race Attitudes*. D. C. Heath and Company.

---------- 1932. "Social Distance Between Catholics, Jews, and Protestants." *Sociology and Social Research*. 17（2）: 167-173.

---------- 1933a. "A Social Distance Scale." *Sociology and Social Research*. 17（3）: 265-271.

---------- 1933b. "Measuring Public Opinion." *Sociology and Social Research*. 17（5）: 465-469.

---------- 1936. *Introduction to Social Research*. Suttonhouse Ltd.

Bulmer, Martin. 1984. *The Chicago School of Sociology*. The University of Chicago Press.

Bulmer, Martin, Kevin Bales, & Kathryn Kish Sklar. 1991. *The Social Survey in Historical Perspective* 1880-1940. Cambridge University Press.

Chapin, F. Stuart. 1920. *Field Work and Social Research*. The Century Co.

Converse, Jean M. 1987. *Survey Research in the United States*. The University of California Press.

Faris, Robert E. L. 1967. *Chicago Sociology 1920-1932*. Chandler Publishing Company.

Fine, Gary Alan. 1995. *A Second Chicago School?* The University of Chicago Press.

Giddings, Franklin H. 1924. *The Scientific Study of Human Society*. The University of North Carolina Press.

Jary, David, & Julia Jary. 1991. *The Harper Collins Dictionary of Sociology*. Harper Collins.
Kurts, Lester. 1984. *Evaluating Chicago Sociology*. The University of Chicago Press.
Lee, Raymond. 2008. "Emory Bogardus and the New Social Research." *Current Sociology*, 56(2):307-321.
Odum, Howard W. 1951. *American Sociology*. Longmans, Green and Co.
Odum, Howard W. & Katharine Jocher. 1929. *An Introduction to Social Research*. Henry Holt and Company.
Palmer, Vivian M. 1928. *Field Studies in Sociology: a Student Manual*. The University of Chicago Press.
Park, Robert. 1926a. "Methods of Race Survey." *Journal of Research*, 6(1):410-415.
---------- 1926b. "Preface." in Emory Bogardus. *The New Social Research*.
Platt, Jennifer. 1996. *A History of Sociological Research Methods in America 1920-1960*. Cambridge University Press.
Shaw, Clifford. 1929. *Delinquency Areas*. The University of Chicago Press.
Smith, Dennis. 1988. *The Chicago School*. St. Martin's Press.
Thomas, Dorothy S. & Ruth Andrus. 1929. *Some New Techniques for Studying Social Behavior*. Teachers College, Columbia University.
Thurston, L.L. & E. J. Chave. 1929. *The Measurement of Attitude*. The University of Chicago Press.
Toy, Eckard. 2006. "Whose Frontier?" *Oregon Historical Quarterly*, 107(1):36-63.
Young, Pauline V. 1932. *The Pilgrims of Russian-Town*. The University of Chicago Press.
秋元律郎 1989『都市社会学の源流』、有斐閣
濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘編 1982.『社会学小辞典（増補版）』、有斐閣
宝月誠・中野正大編 1997.『シカゴ社会学の研究』、恒星社厚生閣
宝月誠・吉原直樹編 2004.『初期シカゴ学派の世界』、恒星社厚生閣
河村望 1973.『日本社会学史研究』（上・下）、人間の科学社
見田宗介・栗原彬・田中義久編 1994.『社会学事典』、弘文堂
中野正大・宝月誠編 2003.『シカゴ学派の社会学』、世界思想社
小川伸彦 1997.「都市的生活と移民集団」、宝月誠・中野正大編『シカゴ社会学の研究』、恒星社厚生閣
徳田剛 2002.「社会的距離概念の射程」、『ソシオロジ』、46(3): 3-18.

Summary

This paper examines the research method of Emory Bogardus in the 1920s through 1930s, seeking an embryo of post-war quantitative sociology in the U.S. Bogardus, a researcher who is known as the inventor of social distance scale, has been given a marginal location in historical studies of Chicago sociology. His research reports in the twenties, however, indicate that he was at first devoted to life-history analysis, and fabricated this measurement in order to settle methodological difficulties of qualitative personal interviews.

Keyword; Chicago school of sociology, life-history, social distance scale.